

研究結果報告書

所属：沖縄国際大学

氏名：安志那

本研究は、戦間期の「満蒙開拓青少年義勇軍」（以下青少年義勇軍）の文学的表象を検討することで、戦時の国策文学から戦後の引揚げ文学にまで続く、移民・国際移動の連続性に注目するものである。そのため、本研究では「満洲」移住協会の機関誌の『新満洲』（1936～1945）に掲載された青少年義勇軍を題材とした文学作品と関連資料を収集し、精緻に分析した。その成果として、1939年に『新満洲』に発表された随筆（山田清三郎「龍鎮日記」）と小説（大滝重直「地の星」、田郷虎雄「焰」）を比較・分析し、発表及び学術論文として公刊した。

「満洲」移民の文学作品の中でも青少年義勇軍を題材とする文学作品研究は殆ど存在しないのが現状である。特に作家の現地視察に基づく随筆に関する分析は初めての試みとして意味を持つといえる。本研究を通じて、数え年16～19歳の青少年で構成された青少年義勇軍の「満洲」移民は成人移民とは違い「拓殖教育」としての学校教育と密接に結びつき、なお保護者の説得という障壁が存在したことを確認することができた。未成年の息子を「満洲」に送ることを拒む親・親類の説得においては、大陸進出などの名分よりも教育者の人格と信頼が有効に作用した。このような研究成果は、未成年者の海外移民が移民政策側にとってどのように認識され、対応されたのかを具体的に明かしたものとして評価できる。当時、『新満洲』が「拓殖教育」の有用道具として使われていたという事実を合わせて考えれば、戦時の教育制度及び児童文学とも深く関わっていると考えられる。また、戦後の引揚げ文学においても青少年義勇軍を題材とした作品研究に繋げることを期待できるのである。

今後は『新満洲』における青少年義勇軍を題材とする記事、視察報告、広告、漫画、イラスト、写真資料を含む学際的な研究へと拡張する一方で、引揚げ文学研究へと繋げるべきと考える。

研究成果の公表について

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

「満蒙開拓青少年義勇軍の文学的な再現」安志那「第46回韓国語文化研究所定期学術大会－災難時代の家族－」2021年1月16日、オンライン発表

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

「満蒙開拓青少年義勇軍の文学的な再現」安志那『韓国語と文化』第29集、2021年2月、151～175頁。

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）